

## 「2017年香港中文大学サマープログラム参加報告書」

京都大学法学部1年 荻野 史菜

香港中文大学サマープログラムへの参加を志望した動機は3つあった。

- ① 全世界を見渡せる大きな視点を持つために、異文化に触れたい。
- ② 世界で最も母語話者の多い中国語を学びたい。
- ③ 文化同士が接触したときに何が起こるのか、かつてイギリスの植民地であった香港で観察したい。どのような成果があったか、まとめたいと思う。

香港中文大学サマープログラム August Session は、世界各国から中国語を学びたい人々が集まり三週間共に学ぶプログラムである。日本人、イギリス人、カナダ人、韓国人など様々な国の人が同じ教室に集まり同じ言語を勉強している状況それ自体が、国際的で驚くべきことだった。

ある韓国の女の子が日本にとっても興味を持っていて、日本文化や日本語についてよく質問してくれた。しかし、私は韓国についてあまり知らなかった。彼女は、日本について予めいろいろ知っていたからこそ質問が出来たのであり、それに私が答えるうちに、彼女と親しくなった。外国の人々と親しくなるため、様々な国に関する知識を蓄えておくことの大切さを知った。在学中に、今まで学んできた世界史に加え、これからは現代史や、現代の若者が興味を持っていることを知りたい。①に関しては、もちろん多種多様な出自の学生が集う環境のなかで異文化に触れ視野を広げることができた。しかし、「異文化に触れる」ことの大切さを改めて感じまだまだ足りないと思った。今まで台湾、香港などアジア圏の地域はいくつか訪れることが出来た。在学中に、今度は欧米に留学したい。欧米の文化を知り、英語運用能力を磨きたいと思った。

②に関して、このプログラムでは、平日は毎日午前、午後の二回中国語の授業を受けた。「聞く」「話す」ことに重点をおいた授業だった。そのなかで「中国語」への意識が大きく変わっていった。まず、今まで一括りに「中国語」と呼んでいた言語は、普通話と広東語、さらに多くの方言に分かれており、それぞれ大きく異なる言語であることを実感し、安易に「中国語」と呼ぶことが出来なくなった。また、私は普通話を学んでいるが、日本人が普通話を学ぶのには、漢字を書けること、漢字にまとわりつくイメージや概念が身につけていることがかなりのアドバンテージであることに気づいた。さらに、普通話には日本語とよく似たニュアンスの文法があり、話しやすい。大学に入ってから第二外国語として学び始めた普通話を、正しい発音で三週間みっちり学べたことは非常に貴重な経験だった。

最後に、③に関して、京都大学の学生には、プログラム中に香港中文大学の歴史学部の学生と互いの文化を紹介し交流する日が設けられていた。その際、私は、イギリスとの不平等な条約から香港の発展が始まったことをどう思うか、質問した。すると、条約が香港に発展の機会を提供したことは否めないが、それを香港が上手く攫っただけであり、不平等な条約であったことに変わりはない、という答えだった。香港文化は根本的に中華だが、その土台の上で多様な文化が融合している、という印象を受けた。香港には中国製品に加え欧米、日本、韓国などの製品があふれており、漢方薬の店の隣にはスターバックスやマクドナルドがあり、高層ビルの谷間にはナイトマーケットの屋台が並んでいる。香港には、プログラム中に訪れた深圳とは全く違う、開放的な空気が流れていた。西欧の文化と中華の文化が接触したとき、西欧文化が一方的に格上の文化とされたために、香港で中華の文化は柔軟性を得て、どんなものも吸収してしまえる強かさを獲得したのではないかと思った。